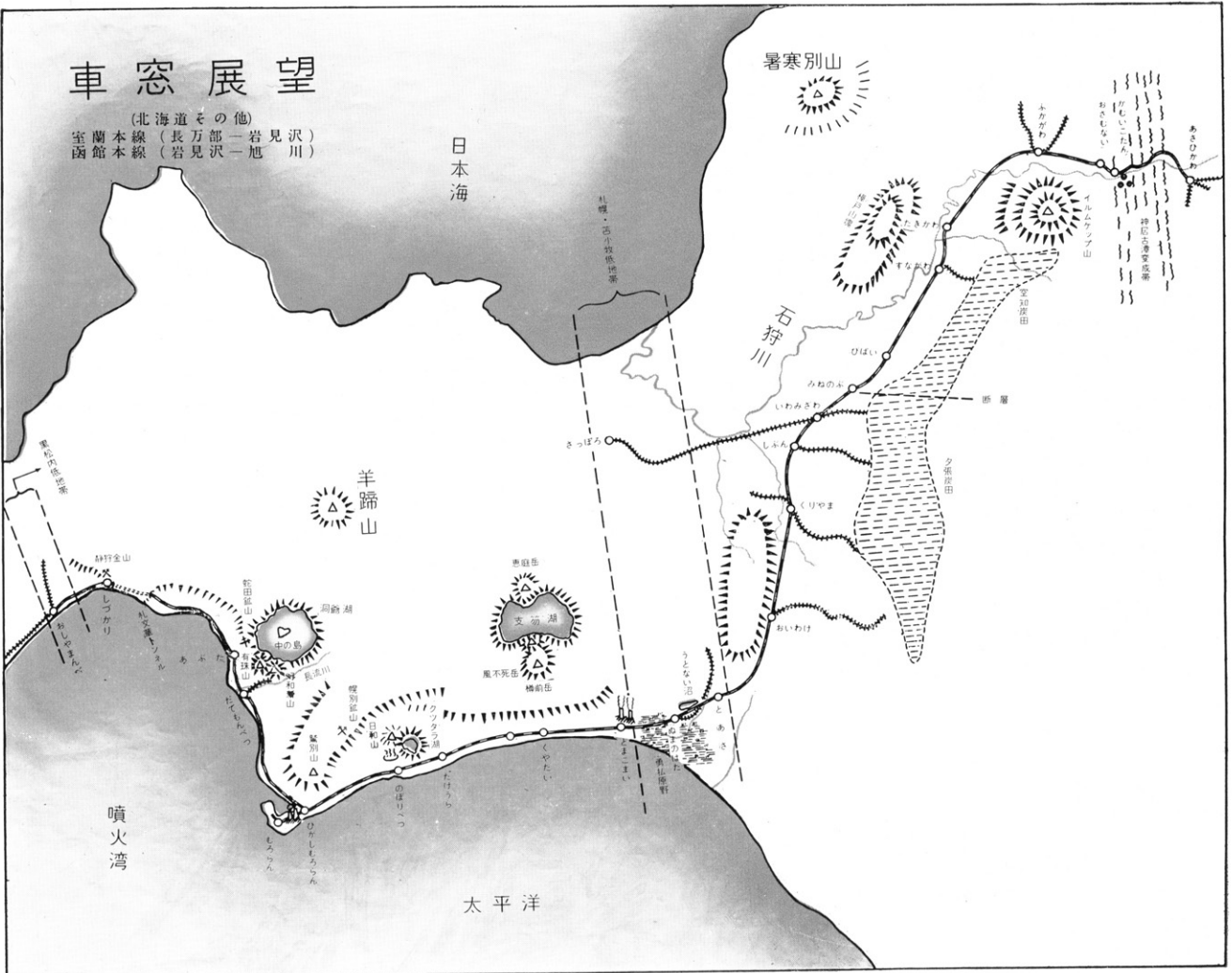


展望窓車

(北海道その他) 室蘭本線 (長万部一岩見沢) 函館本線 (岩見沢一旭川)



洞爺湖と昭和新山

今回の旅は 黒松内低地帯を北上する函館本線とたもとを分かって まず 長万部 から室蘭本線の急行「すずらん」で噴火湾に沿って西進しよう。

寿都 — 長万部 — 森 — 函館を結ぶ 黒松内低地帯 は 西南北海道を2つの地質区に分けるところである (地図参照)。この低地帯の西側は 古生層 の基盤を広くおあって 第三紀の火山岩類 が広く露出している。これに対して東側は 那須火山帯の新しい 第四紀の火山岩類 におおわれて 西側に見られるような古い岩石はわずかしが露出してない。

長万部を発車した列車は しばらく静狩平原と砂浜の間を一直線に走る。静狩付近からは一変して 訓縫層・黒松内層と名付けられた安山岩や石英粗面岩の熔岩・集塊岩の断崖が海にせまる。静狩の北方には静狩金山

があったが 今はその選鉱場の跡が車中から望見されるにすぎない。

ここから うすぎたい火山岩の間を縫って 蛇田までの30分余は 海岸に出 あるいは内陸部に入り いくつかのトンネルをくぐる。その最も長いのが礼文華トンネル。

蛇田は洞爺湖への玄関口で シーズンには観光客の乗降がはげしい。洞爺湖は 巨大な火山火口に水をたたえた 典型的なカルデラ湖で これをめぐる温泉を伴った11個の熔岩円頂丘が集合している。

湖心に浮ぶ中島は カルデラの陥没後その中央火口丘として突出したものである。湖の深さは180m余 この水は発電に利用されており 晴れた日には 湖畔から遠く羊蹄山の秀峯が望見される。蛇田の北方 1.3kmにある 日鉄蛇田鉱山は明治25年(1892)ころ開発された古い鉱山で 今なお褐鉄鉱・硫化鉄鉱の採掘を続けている。



登別温泉 大湯沼の硫黄採掘場

気候温和な蛇田から 列車は有珠山^{うす}の南麓をゆるく屈曲して進行する。有珠火山は径3.5kmの頂部火口中に大有珠(725m)・小有珠の2熔岩丘がタケノコのようにそびえ立っている。

まもなく長流川^{おさる}の沖積はんらん原に出ると有珠山の右手背後にもう一つよく似た形の山が現われる。両者はあたかも親子のごとくで子供のほうは今なお煙を吹いている。これが昭和新山である

昭和^{しやうわ}新山は昭和18年(1943)暮から活動をはじめ翌19年12月に入って盛り上った畠の真中から真赤な熔岩が頭を出しはじめ昭和20年(1945)1月までに約300mの新しい火山が出現した。わずか2年そこそこでこのような火山が出現したことは火山国の日本でさえ全く珍らしいことである。

鉄の街から登別温泉へ^{ぼりべつ}

長流川をわたると間もなく伊達町。胆振線を分枝しその線の沿線には大小の鉱山がみられる。

伊達から南下した列車は約30分で室蘭工業地帯に突入する。室蘭とは「ゆるやかな坂」という意味の

左の小屋のそばにしゅんせつ船がみえる

アイヌ語。天然の良港室蘭港は石狩炭田の石炭の積出港であり明治25年(1892)に夕張—追分—苫小牧—室蘭の石炭輸送の大動脈として室蘭線の前身が完成した時からその歴史が始まる。ただに石炭のみでなく背後には渡島・後志の鉄資源を控え明治43年(1910)には日本製鋼所がひらかれ北海道の重工業の草分けともなった。これに加うるに北海道でもっとも積雪量の少ないという好条件にめぐまれ現在では日鋼室蘭製鋼所をはじめとして富士製鉄室蘭製鉄所 富士セメント 日石精油所 函館ドックなどの大工場が林立し最近隣接の伊達・幌別両町をも包含して北海道の一大工業地帯を形成している。

東室蘭を出ると90度方向をかへ北東へと向かう。左に鷲別山(911m)をながめしばし砂鉄の採掘が行われている砂浜に沿って走り間もなくいで湯の町登別温泉の入口 登別につく。温泉の源である荒々しい地獄谷はクッタラ火山の西麓の爆発口。安政年間から開かれたこの温泉は泉質多様で北海道一の規模を誇っている。すぐ北方の日和山麓の大湯沼は直径200×300mの



有珠山(近景)と昭和^{しやうわ}新山(遠景) 両者ともきわめてよく似た熔岩岩尖(スパイン)である



←
 苫小牧の背後には火山噴出物の台地をへだてて支笏湖をめぐる火山群がかすむ

火口であって その火口内に湯をたたえている。そして火口底には 多数の硫気孔が開き 湖底には摂氏 130 度ぐらいの熔融した硫黄が湧出しており 湖上に舟を浮かべてすくい上げている珍しい風景がみられる。汽車で虎杖浜・竹浦の海岸地帯から眺めると 円すいの頂部がかけた（陥没した）クッタラ火山は平らな梯形の山で 陥没した山頂には径 3 km の完全な環状壁でかこまれたカルデラ湖が発達している。この火山から吐き出した熔結凝灰岩は山体のまわりに広い高原状台地をひろげ 末端は白いがけとなって終わっている。

紙の町から札幌—苫小牧低地帯へ

萩野・白老・社台と 左手に今度は支笏カルデラの爆発による 支笏泥熔岩の台地の白いがけを眺め 右手に

こんぺきの太平洋を臨みつつ列車はたんたん^{とまこまい}と苫小牧に向かう。白老にはアイヌの部落があり 白老から社台にかけては馬の産地で し肢のびやかな駿馬・若駒が砂丘地帯に遊んでいるのがみられよう。

左手は洞爺湖の幾10倍の大きさの支笏湖をめぐる火山群で 樽前山 (1024m) の姿が一きわめだっている。やがて 東室蘭から1時間で苫小牧。ここはまったくの紙の町。冬には市周縁の沼や製紙会社の貯水池がおあつらえ向のリンクとなり スケートがむらがる。

王子製紙や国策パルプの煙突をあとに市街を出れば前途に荒涼とした勇払原野^{ゆうふつ}が広がる。札幌—苫小牧低地帯の南端部にあたる一面不毛の地である。樽前・恵庭からの火山灰層に厚くおわれた湿原で 今の

ところ手のほどこすすべのないまま放置されている。将来機械力で排水運河が切られ 深層まで反転耕作されようとはしているが、

急行「すずらん」は苫小牧から旧北海道拓殖鉄道 現在の千歳線^{ちとせ}に入っ

て札幌に向かう。途中千歳には北海道の空の玄関千歳空港がある。



樽前山中腹から風不死岳とその左隣に遠く羊蹄山を望む



遠浅付近の支笏火山からの火山灰台地
このあたりは1つの大きな牧場地帯となっている

よう。列車は一路札幌 — 苫小牧低地帯を北進し 間もなく沼の端。右手は一面の湿原で ウトナイ沼がいまだ沖積作用に埋積されることなく残っている。

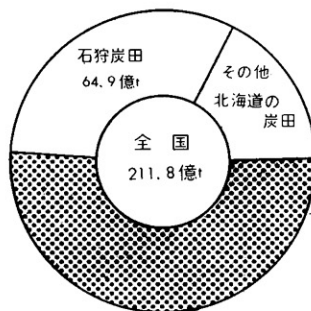
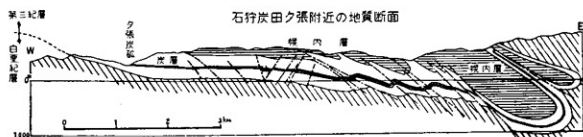
沼の端を出はざれると たんたんとした10~25mの火山灰台地の上を進む。この台地も洪積期末の支笏火山の軽石層によって構成せられ わずかに牧草地として利用されているにすぎない。白樺の林の陰にサイロが点々とたち ホルスタイン種の乳牛の群をなす様子はまさに大陸的である。

しかし 牧歌的などかな風景をもたらした火山灰も その噴出した当時のすさまじさを思うと戦りつをおぼえずにはいられない。

この爆発物 すなわち熱雲は 非常な早さで広がり その降下・堆積した範囲は東は追分付近

→

石狩平野と石狩川(空中写真)
奈井江付近
耕地は規則正しく整理され 函館本線と国道が真直に走っている 国道は27kmの直線で 日本最長の直線路である 石狩川は みごとに蛇行の這い路を示している



全国理論埋蔵炭量

西は喜茂別まで達しており 東西80km 面積にして優に 1,200 km² あまりの広大な荒廃地が一瞬の間に生れたわけである。

石狩炭田に沿って

火山灰台地の中心遠浅の明治乳業の高い煙突をあとにすると まもなく列車は低地帯を斜に横切って **非火山性の新第三紀層** の発達する地域に入る。やがて追分。ここから分岐する夕張線の沿線には追分層を初めとする第三紀層の好露出が発達し 札幌からも日帰りコースなので 北海道の地質家にとって もっともなじみ





←

砂川・深川間の低平な堆積岩からなる丘陵のスカイライン上に玄武岩の岩脈や凝岩丘がその単調さを破っている 写真は砂川・滝川間にある石山と神居岳

の深い地層見学コースの1つである。

北上する車窓の左手には 馬追山のなだらかな峯が連なり石狩平野の遠望をさまたげている。 右手には第三紀層の鋸歯状の山稜が遠くえんえんとつながり その山懐には石狩炭田が抱かれている。 栗山を出はざれると列車はようやく石狩平野に出る。 延々と続く水田のところどころには ポプラが天にもとどくばかりにそびえ はるか向こうには樺戸山塊がかすんでいる。 栗山・志文しもんで石狩炭田に入る支線をあわせ 苫小牧から1時間半で列車は交通の要衝岩見沢に入る。

ここ岩見沢は室蘭線の終点で 函館本線との連絡駅。 北海道一の操車場をもち 石炭列車 坑木列車が目白押しにならんだ様は圧観である。 ここから幌内ほろない・幾春別いくしゅんべつに分かれる幌内線は 明治15年(1882)完成した日本3番目の鉄道であって 70有余年にわたって石炭輸送に活

躍している。

この奥にある幌内炭鉱は 日本地質学の大恩人 **ライマン** 等の調査によって開発されたもので その調査は1876年 10尺ごとの等高線による 1/5,000 地形図を使用し 炭層の賦存状況をあらわすに 100尺ごとの地下等高線を用いている。 けだしわが国最初の近代的地質図であろう。

岩見沢から函館本線に乗り換え旭川に向かう。 発車するとまもなく峯延ねののぶ。 ここを通る東西性の断層は石狩炭田をさらに2つの空知・夕張両炭田に分けている。

列車は右手に空知炭田の諸炭鉱を眺めながら 美唄みづい・砂川・滝川と石狩平野を北上する。 左手には 蛇行する石狩川の堆積した平地をへだてて 古生層といわれる樺戸山塊・暑寒別火山の連峯が望まれる。

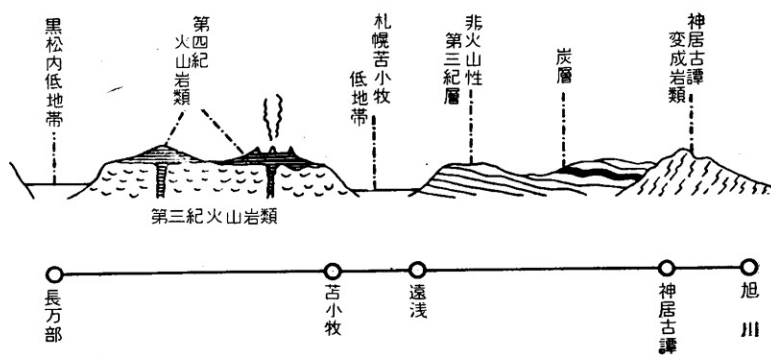
しかし 樺戸地区には第三紀の樺戸夾炭層があり これが石狩炭田続きと考えられ したがって中央平野部の



←

納内付近の水田地帯とイルムケップ山

これをすぎると石狩平野はつきて 神居古潭の峡谷に入る



長万部・旭川間の地質の概要を示す断面図

地下にも両者の連続層が想定される。事実 奈井江では地震探査やボーリングによってその存在が確認されそれ以来平原下の石炭が脚光を浴び 美唄付近でも同様な調査を行っている。

日高山脈のふところ深く

滝川は空知川と石狩川の合流する所 かつて明治の文豪高山樗牛によって「音はするが河の姿は見えない」と言われたこの付近も一面の水田となり 大工場さえ建設されている。延々20km 30kmの直線路の走るのもこの付近である。すべてが新らしく すべてが希望に満ち満ちている。

滝川付近から深川にかけて 第三紀上部層のなだらかな丘陵が続き その単調なスカイラインをやぶって点々と玄武岩の岩脈や熔岩丘が見える。

留萌線 深名線の分岐点深川をすぎると 列車はイルムケップ火山の北側を遠回りする。このあたりから石狩平野がグッとせばまり 納内をすぎると 神居古潭の峡谷はすぐである。

石狩川が蝦夷山系の支脈を横断する際にえぐったこの峡谷は カムイ（神）コタン（部落・住む所）の名の通り 往時は人間の近寄り難い幽谷であったにちがいない。峡谷の入口近くには アイヌのサマイクル王城跡や原住民の堅穴住居跡がある。

また地質学上は 神居古潭変成岩類といわれる蛇紋岩や結晶片岩の標式地。

ややしばし 山腹を縫い 峡谷を出はざれると 突如と旭川の盆地が展開し かなたには北海道の屋根 日高山脈の主峰大雪火山(2290m)から右方十勝岳(2077m)の山嶺が雄大な姿をあらわす。これらの山々から流れ下る石狩・牛朱別・忠別・美瑛の諸河川は この上川盆地をめぐってあつまっている。明治年間屯田兵によって原始林を切り開かれたのが開拓史の始まり 今や100万石の穀倉地帯 商工業もまた鼻息が荒い。

列車はやがてその中心地 落着いた基盤目の計画都市旭川にすべりこむ。 (北海道支所地質課および地質部)

→
アイヌの伝説を秘めた神居古潭峡谷
変成岩研究者の間ではとくに知られたところ

